

基金ホームページURL ● <http://www.jkcf.or.jp>

発行 財団法人 日韓文化交流基金  
〒105-0001 東京都港区虎ノ門5丁目12番1号  
虎ノ門ワイコービル3F  
電話 03-5472-4323 FAX 03-5472-4326  
発行日 2005年1月7日

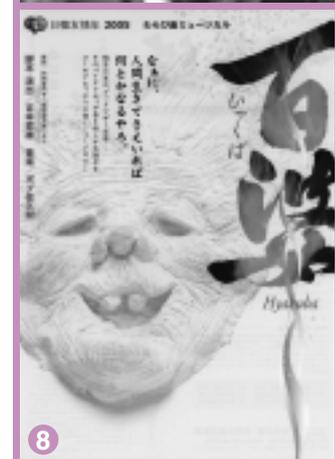


# 日韓友情年2005

日韓国交正常化40周年を迎える今年は、「日韓友情年2005 ～進もう未来へ、一緒に世界へ～」にあたります。両国の津々浦々で相互理解と友情を深めるための様々な市民参加型の交流イベントがはじまっています。当基金の広報誌においてもこの1年間、「日韓友情年2005」の情報を紹介していく予定です。

あなたも、「日韓友情年2005」のイベントに参加してみませんか。

<http://www.jkcf.or.jp/friendship2005/>



①日韓ダンスコンタクト ②'05食博覧会・大阪 ③演劇「ナガサキ'ン グラフィティ」  
④、⑤、⑨青少年交流(資料写真) ⑥映画「もし、あなたなら～6つの視線」  
⑦映画「酔画仙」 ⑧ミュージカル「百婆」 ⑩映画「大統領の理髮師」

# 日韓友情年2005 イベントカレンダー

(2004年11月15日現在)

1月 ~ 3月

2005年は日韓両国各地でイベントが目白押しです。ここでは1月から3月までの事業を紹介します。

タイトル	主催者	期間	開催場所
1000人ホームステイボランティア事業	(財)名古屋国際センター	2004/4/20-2005/9/30	名古屋市内または名古屋市近郊
映画「酔画仙」ロードショー	(株)新日本映画社	2004/12/18-2005/2/28	東京・岩波ホールほか全国公開予定
釜山青少年ホームステイ交流	HIPPO FAMILY CLUB、 (社)釜山韓日文化交流協会	2004/12/27-2005/1/8	東京
映画「大統領の理髪師」日本公開	アルバトロス・フィルム	2005新春	東京・東急Bunkamuraル・シネマほか、 全国公開予定
日本体験3週間プログラム	BSC ウォータースポーツセンター	2005/1月-12月	滋賀・BSCウォータースポーツセンター
第24回いぶすき菜の花マラソン	いぶすき菜の花マラソン大会 実行委員会	2005/1/9	鹿児島・ふれあいプラザなのはな館、 指宿市陸上競技場
もし、あなたなら～6つの視線	キノ・キネマ、エブコトーア ルシネテラン・ディヴィジョン	2005/1/15-3月中旬	東京・新宿武蔵野館ほか、全国公開予定
キムチコンテスト	神奈川県立中央農業高校	2005/1月下旬-2月上旬	神奈川県立中央農業高校
第14回開高健記念アジア作家講演会	独立行政法人 国際交流基金	2005/2月予定	東京、大阪ほか
日韓合作演劇「祖国に種を蒔く」 (韓国、日本公演)	劇団えるむ、韓国演劇協会、 民衆劇団	2005/2月下旬-5月	ソウル、釜山、東京ほか
厚木市・軍浦市友好都市締結調印式 (厚木市政50周年記念式典)	厚木市	2005/2/5	神奈川・厚木市文化会館
「南海のムリカ星」公演	(株)エーシーオー沖縄	2005/2/5-2/6	ソウル・世宗文化会館
韓日児童青少年演劇祭2005・ イツフォーリーズ韓国公演2005	(株)オールスタッフ	2005/2/12-2/20	ソウル・西江大校メリーホール、 京畿・果川市民会館、議政府・芸術の殿堂
韓日児童青少年演劇祭2005・ 劇団ひまわり韓国公演	(株)劇団ひまわり	2005/2/12-2/23	京畿・果川市民会館、議政府・芸術の殿堂、 ソウル・西江大校メリーホール
李秀賢氏記念韓国青少年招聘事業	独立行政法人 国際交流基金	2005/2/14-2/24	大阪・国際交流基金関西国際センター
日韓ダンスコンタクト	(財)児童育成協会、 青山円形劇場	2005/2/15-2/20	東京・青山円形劇場
第3回初級学習者のための 「話してみよう韓国語」東京大会	駐日大韓民国大使館 韓国文化院	2005/2/19	東京・abcホール
アジアINコミック2005～躍動する中国、 韓国、日本のオンライン漫画の現状と将来性	独立行政法人 国際交流基金	2005/2/19-2/20	東京・国際交流基金フォーラム
学生のための国際ビジネスコンテスト OVAL2005	学生シンクタンクWAAV内 OVAL2005実行委員会	2005/2/21-2/27	東京・国立オリンピック記念青少年総合センター
第3回初級学習者のための 「話してみよう韓国語」大阪大会	駐大阪大韓民国総領事館 関西韓国文化院	2005/2/26	大阪国際交流センター小ホール
韓国の日本語学校訪問ツアー	NPO法人 市岡国際教育協会	2005/3/1-12/31	ソウル・漢陽女子大学
日韓交流 小倉紀蔵先生とパク・トンハさんと行くハングル体韓の旅	JTB首都圏第一事業部	2005/3/3-3/6	ソウル、春川ほか
第8回 国際交流女性写真展 in とよた	とよたレディースフォトクラブ	2005/3/4-3/6	愛知・豊田市民ギャラリー
日韓バイオインフォマティクス トレーニングコース	情報・システム研究機構 国立遺伝学研究所	2005/3/7-3/10	大田・韓国生命工学研究院
日韓・フレンドシップ乗馬交流	NPO法人 RDAJapan	2005/3/18-3/21	京畿・韓国RDAサムソン
韓国一周友情ウォーク	韓国一周友情ウォークの会	2005/3月下旬-5月下旬	韓国各地
2005年日韓Wリーグチャンピオンシップ コリアゲーム、ジャパングーム	バスケットボール女子日本リーグ機構(WJBL)、 (社)韓国女子バスケットボール連盟(WKBL)	2005/3/23-3/26	ソウル・奨忠体育館、 東京・国立代々木競技場第2体育館
「最終目的地は日本」公演	木山事務所	2005/3/24-3/29	ソウル・世宗文化会館小劇場、 釜山文化会館
J-Style in Seoul Street ジャパン・コリア・ロードクラブフェスティバル	独立行政法人 国際交流基金	2005/3/25-3/27	ソウル・弘益大校地区一帯のクラブ、 ライブハウス、ギャラリーほか

# 日韓文化交流基金図書センターのあゆみ

日韓文化交流基金図書センターは、誰でも利用できる韓国および日韓交流の専門図書館です。1995年10月の開館以来、2004年10月をもって開館10年目を迎えました。韓国・朝鮮半島への関心が高まってきている昨今、求められる情報・知識の内容も多種多様で、より専門的なものになってきています。図書センターは今後も「図書館を通して韓国・朝鮮半島文化を知る」機会を提供していきたいと考えています。



## 図書センター開設の経緯

1994年8月31日、村山総理（当時）は翌年の戦後50周年を前にして「平和友好交流計画」に関する談話を発表しました。計画は歴史図書・資料の収集、研究者に対する支援を一つの柱としており、その取り組みの一環として日韓文化交流基金図書センターの開設が決まり、翌年の1995年10月にオープンしました。

## 所蔵資料の特徴

人文科学・社会科学分野を中心とした韓国・朝鮮半島に関する図書（和・韓・洋書）、視聴覚資料（映画、ドキュメンタリー、教材、歌謡曲、民族音楽）、マイクロフィルム（対馬宗家文書）、民俗資料などを収集・所蔵しています。

2004年3月には蔵書冊数が2万冊に達しました。日韓両語の資料をまとめて閲覧できるのが、当図書センターの最大の利点となっています。

また、韓国のビデオ・DVDをはじめとした視聴覚資料が充実していることも当センターの特徴です。

### 所蔵資料数（2004年10月末）

	日本語（英語等も含む）	韓国語
図書	10,932冊	9,798冊
逐次刊行物	122タイトル	78タイトル
新聞	4タイトル	5タイトル
ビデオ・DVD	342点	620点
CD・カセット	213点	488点
マイクロフィルム	249点	—
CD-ROM	—	6点
民俗資料	展示用韓服、遊び道具、国旗など	

## 主な利用者と利用者数

開館以来、利用登録者数は3千人に達しました。利用者は韓国の文化・社会情報・語学に関心のある社会人と、レポートや論文など研究を目的とした大学生・大学院生・留学生・研究者が中心層をなしています。最近では総合的な学習の一環として、小・中・高校生と教員が図書センターを利用するケースが増えています。

利用者数

1996年度*	893人
1997年度	2,469人
1998年度	3,039人
1999年度	4,441人
2000年度	2,744人
2001年度	2,610人
2002年度	3,187人
2003年度	3,066人
2004年度**	1,833人

\*1996年度は9月後半からの人数  
\*\*2004年度は10月末までの人数

## 利用のご案内

### ● オンライン検索

所蔵資料はインターネット上で検索が可能です。韓国語資料もハングル入力により検索できます。なお、館内の所蔵検索端末で、韓国・朝鮮半島関係の資料を所蔵している他機関のデータベースやインターネットサイトも閲覧できるようになっています。

図書センターホームページ  
<http://www.jkcf.or.jp/library/>



### ● 開館時間

月・水・金 10:00 - 18:00  
火・木 10:00 - 19:00  
土日、公休日、年末年始は閉館  
館内整理期間など臨時休館あり

### ● 問い合わせ先

電話：03-5472-6667 Fax：03-5472-6668  
E-mail：lib1@jkcf.or.jp

# 第4回日韓歴史家会議

10月29～31日の3日間、都内で第4回「日韓歴史家会議」が開催され、両国の研究者が歴史学という大きな枠組みの中で幅広い意見を交換しました。



総合討論（10月31日）



佐々木隆爾教授

日韓歴史家会議は、1997年より3年間活動を行った「日韓歴史研究促進に関する共同委員会」の提言を受け、日韓両国の歴史研究者が相互に対する理解を深め、交流と協力の輪を拡げる両国歴史研究者間の「交流の場」とすることを目的に2001年にスタートしたものです。

これまでに開かれた3回の会議では、「1945年以後の日韓両国における歴史研究の動向」「世界史の中の近代化・現代化」「ナショナリズム：過去と現在」を主題として、日本史、韓国史のみならず、中国史やヨーロッパ史、中東史等を専門とする両国の研究者が、歴史学という大きな枠組みの中で幅広い意見の交換を行ってきました。

10月29日、会議初日には本会議の開催を記念し、「歴史家の誕生」と題する講演会が開催されました。日本側からは佐々木隆爾日本大学教授が、韓国側から

は車河淳西江大学校名誉教授がそれぞれ、「歴史家と歴史教育者の間」「内的世界の探索のために」と題して講演し、自身の歴史家としての歩みについて語りました。

佐々木教授は、東京都立大学を定

年退職後、新たに赴任した大学において実践した「よい教育者」たるための試みについて紹介し、自身の専門分野である日本現代史、特に朝鮮戦争との関連についての講義や学生との対話を通じて「『歴史家としての誕生』の端緒をつかんだ」と述べました。

車河淳教授は、思想史、特に西洋思想史を学ぶことになった自身の研究遍歴について語った後、自らが体験した社会現実を通じて得られた歴史観として、「人間の経験には時と空間を超越した共通性」があり、「歴史家は自分の専攻分野が何であっても‘世界史家’である」という点、「人間の歴史は自由の増大に向けた展開過程」であるという点を強調しました。

10月30、31日に行われた第4回会議では、「歴史研究における新たな潮流：伝統的知識の役割をめぐって」を全体テ



車河淳教授

ーマとして、地球環境の破壊や、民族的・宗教的対立が続く中で、技術と生態系の調和、都市における社会的結合のための知恵など、さまざまな面で人類が蓄積してきた伝統的知識がいかなる役割を果たすことができるのかということについて、各セッション別に報告・討論が行われました。

セッションでは、近年の新しい研究潮流を反映した報告に対し、参加者の間で活発な討論が行われました。

## 日程

### 10月29日(金)

#### 公開講演会「歴史家の誕生」

佐々木隆爾（日本大）

「歴史家と歴史教育者の間」

車河淳（西江大名誉教授）

「内的世界の探索のために」

### 10月30日(土)

#### 1. 歴史の中の自然と技術

司会：宮嶋博史（成均館大）

日本側報告：徳永光俊（大阪経済大）

「江戸農書にみる日本農法」

討論：鄭哲雄（明知大）

韓国側報告：李泰鎮（ソウル大）

「外界衝撃大災難説(Neo-Catastrophism)

と新しい歴史解釈」

討論：鈴木淳（東京大）

全体討論

#### 2. 都市史における伝統的知識

司会：城戸毅（岐阜聖徳学園大）

日本側報告：高澤紀恵（国際基督教大）

「近世バリにおける伝統・安全・公」

討論：崔甲壽（ソウル大）

韓国側報告：高東煥（韓国科学技術院）

「朝鮮時代の漢陽の形成と変化」

討論：吉田光男（東京大）

全体討論

#### 3. 海洋史から見た人のつながり

司会：濱下武志（京都市大）

日本側報告：松浦章（関西大）

「前近代東アジア海域間の交流—海洋史

の視点から—」

討論：呉星（世宗大）

韓国側報告：朱京哲（ソウル大）

「近代初頭の海運の発達と知の拡散」

討論：長島弘（長崎県立大）

全体討論

### 10月31日(日)

#### 4. 総合討論

司会：板垣雄三（東京大）

# 時代と地域を越えた歴史家の出会い——日韓歴史家会議について

日韓歴史家会議日本側運営委員代表 宮嶋博史

日韓歴史家会議は、日韓両国政府の委嘱に基づいて設置された「日韓歴史研究促進に関する共同委員会」の提言を受けて、両国歴史家の交流の場として2001年に発足した。

日韓両国の研究者の間では、さまざまな分野においてきわめて多様な形で交流が行われているが、この会議は地域や時代を限定しないで、あらゆる歴史家が一堂に会して共通のテーマについて討論する場であることを趣旨としている。したがってその運営は、国際歴史学委員会の日韓両国国内委員会を中心に組織委員会を設け、組織委員会の下に日常的な連絡等を担当する運営委員会を置くという形で行われている。

## 歴史研究の方向を探る

2001年の第1回会議から始まって、2004年まで、毎年一回ずつの会議が開催されてきた。第1回会議は「1945年以後の日韓両国における歴史研究の動向」というテーマで、東洋史・西洋史・日本史・韓国史といった各分野の研究動向を整理し、今後の研究課題について、共通の理解を深めることを目的として開催された。続く第2回、第3回の会議では、「世界史の中の近代化・現代化」「ナショナリズム：過去と現在」をテーマとして、これまで両国の歴史研究において中心的な課題であった問題について議論したが、今回の第4回会議は、「歴史研究における新たな潮流：伝統的知識の役割をめぐって」をテーマに開催された。全体は三つのセ



セッション会場のようす

ッションに分かれ、「歴史の中の自然と技術」「都市史における伝統的知識」「海洋史から見た人のつながり」という主題で、近年の新しい研究動向を反映した報告と討論が行われた。第1回から第3回までの会議が、どちらかといえばこれまでの研究史を整理することに重点が置かれたのに対し、今回の会議は今後の歴史研究の方向を探ることを目標としたものであった。両国歴史家の「挨拶」の段階から、「本格的な討論」の段階に移ったということができよう。

また、会議の前日を利用して、第2回会議以後、「歴史家の誕生」という講演会もあわせて開催されることになった。両国の歴史研究において中心的な役割を果たされてきた方々に、歴史家としての歩みを振り返っていただく場として、毎回、貴重で含蓄に富む講演が行われている。

## 両国間に多彩な討論の場を

周知のように、日韓両国の間では、教科書問題に象徴されるように、歴史

研究と歴史教育の問題が政治問題化することが多かったし、そうした傾向が容易に解決されるとは思われない。近年、こうした問題を意識しつつ、両国の間で多彩な討論の場が持たれるようになったのはまことに喜ばしいことであるが、日韓歴史家会議は、日本史と韓国史の研究者だけの討論でなく、地域と時代を超えた多様な分野を専門とする歴史家が、共通のテーマについて自由に討論することのできる場であることに、最大の意義を見出している。これまでも多くの研究者が積極的に参加して下さったが、これからも特に若い世代の研究者の参加を呼びかけていきたいと考えている。

### PROFILE

みやじま ひろし



成均館大学校東アジア学院教授。  
1948年生まれ。京大文学部東洋史学科卒。専門は韓国社会経済史。  
2002年より現職。主著に『朝鮮土地調査事業史の研究』（汲古書院、1991年）、『両班』（中公新書、1995年）、『明清と李朝の時代』（共著、中央公論社、1998年）

# 劇団態変 ソウル公演2004 「帰郷—ここが異郷だったのだ」報告

劇団態変芸術監督 金満里

劇団態変は今秋、旗揚げ21年にして初めての韓国公演を行った。私が芸術監督を務める劇団態変は、作・演出・出演すべて身体障害者のみで構成し、身体での表現を行う世界に類を見ない芸術集団である。私自身が在日2世であり、亡き母・金紅珠が韓国古典芸能家である由縁からか、「韓国公演は初めて」というと大抵驚かれたが、態変の海外公演はこれまでケニア(1993)以外はヨーロッパが主であり、アジアでは、昨年2003年の台北でのソロ公演まで、実は一度も上演の機会がなかった。しかし、ここ最近アジアのアート関係者との交流が少しずつ始まり、今回のソウル公演もそういったアジアでの芸術交流や公演活動をさらに広げるきっかけになると思っている。

## 韓国での初公演に向けて

今回のソウル公演は、「そろそろ韓国で態変の公演が観たい」というお声を受け、長年アジアの演劇交流に尽力しておられる西村博子氏(タイニイアリス主宰)にご紹介いただいて、ソウルの劇団木花(代表:呉泰錫氏)に現地受け入れとしての協力を得て体制を整え、日韓文化交



アルングジ劇場前に大きな垂れ幕が掲げられた

流基金の支援を受け、実現に向けて動き出した。

まず決めなければいけないのは、劇場である。4月にソウルに赴き、市内7劇場を見て回った結果選んだのは、大学路のアルングジ劇場という劇団木花所有の約170人収容の地下の小劇場。広い舞台と高い天井をもつステージは、どの客席からも床面が見渡せ、役者の動きがよく見えることが何よりだった。そして大学路という演劇街がもつエネルギーも魅力的であった。ぐるっと一回りしても15分もかからない小さな街に、40もの小劇場がひしめきあい、連日連夜、若者でごったがえし、アフター5を楽しむついでに、ふらっと芝居を観に地下の劇場を訪れる。舞台公演がこれほどまでに日常生活に密着していて、特別扱いたくない感覚、そしてこの街の熱気と躍動感は、芝居と生でぶつかって面白い反応をするのでは、という直感があった。

というのも、韓国の舞台芸術では、演劇か舞踊かというジャンル分けが歴然としてあると聞いたことがあったからだ。演劇の劇場には演劇愛好者が集い、舞踊の劇場には舞踊ファンが観に来るが、お互いに観に行きあうということはず、どちらでもない表現というのはあまり例

がない、と。台詞を用いない態変の身体表現はどちらでもあり、どちらでもない、ジャンル分けができない表現なのだが、初めての公演で使用する劇場によって、演劇か舞踊かのラベルを貼られてしまいたくはなかった。むしろ韓国のジャンル分けのはっきりした社会

に全く新しい舞台芸術を持ち込みたいという狙いがあった。この挑戦を演劇のメッカである大学路の若者たちの柔軟さと貪欲さが受け止めてくれるのでは、という期待を込めて、大学路を選んだのである。

こうした挑戦を試みる時、勝負の決め手になるのは表現の完成度である。古典舞踊が今も息づき、身体での表現が優れている韓国では、手前勝手な表現では通用しない。逆に完成度が高ければ、演劇と舞踊の垣根も障害と健常の垣根もすっ飛ばして、芸術を感受する観客がいるはずだ。もう一度作品を見直して、徹底的に無駄な動きを排除し、コンパクトに凝縮した身体表現を創り上げることを目標に稽古に努めた。

企画の立ち上げと同時進行で、ツアーのための組織づくりにも着手した。今回の上演作品『帰郷—ここが異郷だったのだ』は6月に大阪で初演した新作だが、海外ツアーとなると役者の介護や舞台設営などすべて、黒子と呼ぶ本番の舞台進行を役者と共に担う裏方が行うことになるので、スタッフの増員が急務であった。そして集まった新人3名を加えた7名の黒子、6名の役者、制作1名の計14名(ツアーには技術者3名が加わり計17名)が、今回のソウル公演の位置づけをきちんと認識して、組織内の連携、コミュニケーションのトレーニングを行った。こうまで組織づくりに注力するのは、健常者ばかりの集団と違い、身体障害者が半数の集団の場合、組織の連携がつかずくと、最終的なしわ寄せは、役者の障害者、特に寝たきりで言語障害もある重度障害者にまわってきてしまう。夏には2泊3日の事前合宿も敢行し、役者をベストな状態で舞台に送り出すための生活ペースの実地練習、態変の芸術性やポリシーに

ついでにディスカッションから、日韓関係史の勉強会まで、様々なプログラムを通じ、メンバー全員がこのプロジェクトに主体的に関わり、自転する動きを学びとった。この成果があって、3年ぶりの海外公演は非常にストレスの少ない公演ツアーとすることができた。

## 口コミ人気に支えられた

企画の初段階から9ヶ月、稽古開始から3ヶ月経て、いよいよソウルへ。韓国はお盆連休にさしかかる9月26日、厳重に梱包された大量の舞台美術・小道具の荷物と共に現地入りし、2日間の仕込みとリハーサルを終え、29日の初日を迎えた。

終演後の拍手は、しばらく鳴り止みそうもなく、全公演の中で一番大きいように感じた。観客数は連休にしては健闘の27名。半数が20代の若者で、彼らはインターネットで面白そうな芝居を探し、観に来るのだとか。この日から5日間6回公演が続いた。彼らのような観客は毎回必ず半数くらいを占め、非常に熱心に見入り、終演後も猛烈に感想を語りあいながら帰る姿が印象的だった。「何だろう、これ」と戸惑いつつも、鋭く感性に響いていたのだろう。

公演回数を経るごとに、役者と黒子の息はぴったり合い、観客数は少しずつ伸び始めた。特に5回目の公演は、ひとつひとつ稽古で積み重ねた全てを出しきれた舞台になったと自負している。観客からの反応もひとときわ熱く、カーテンコールをいただくことができた。

観客からは、「明日、また来ます」とか「友達に宣伝しなくては」という嬉しい声もいただき、その口コミが集客の伸びにつながった。これは韓国の演劇事情



本番公演前の「気合わせ」のようす

を端的に表す例であるようだ。今、韓国は情報が溢れ、人々はマスコミが流す美辞麗句の宣伝文句を信用しなくなっていること、そして不景気で観たい芝居にしか金を出さなくなっていることから、公演情報もマスコミからはあまり浸透せず、口コミが最も信頼されているという。そのため、韓国の劇団が公演を行う場合は、最低1ヶ月のロングランで、動員が低迷する1〜2週間を我慢して、ようやく3週目あたりから口コミで広がるのを期待するというスタイルになっているようだ。

海外からの劇団にとっては厳しい現実だが、まずは果敢に作品発表を行い、種蒔きをし、芽を生み出すことが必要だ。今回、足を運んでくださった観客が、態度の次回の韓国公演を期待してくれば、ぜひ近いうちにまた参上したい。非常に嬉しいことに、今回の公演を機に、韓国の舞台芸術フェスティバルの関係者の方が興味を示しているという声を聞き、表現者のグループからワークショップの指導者として迎えたい、というお話もいただいた。また、私の身体論に関する著作を韓国で翻訳・出版したいという

以前からの声も根強い。こういった芽を大切に育て、交流を深めて、ぜひ実現していきたいと思っている。ゆくゆくは、韓国でのロングラン公演も夢ではない。そして、韓国から始まる態度のアジアへの第一歩を大きく踏み出したい。

### <劇団態度韓国公演>

2004年9月29日(水)~10月3日(日)  
5日間 6ステージ

9月 26日(日) ソウル入り

27日(月) 仕込み

28日(火) リハーサル

29日(水) 19:30 本番1

30日(木) 19:30 本番2

10月1日(金) 19:30 本番3

2日(土) 15:00 本番4

19:30 本番5

3日(日) 15:00 本番6 ばらし

4日(月) 帰国

### PROFILE

きむ まんり



1953年生まれ。1983年に劇団態度を結成。芸術監督としてこれまでに50作を作・演出。自ら出演もする。独特の身体観に基づくワークショップや金満里身体芸術研究所での研究生の指導に精力的に取り組んでいる。

これまでの都市間人口移動研究の中で、空間的移動パターンの焦点になってきたのは、移動が近接性原理と階層的結合関係によって、どの程度説明できるかということである。近接性原理というのは近接する地域間ほど人口移動が多いことを意味する。また、階層的結合関係というのは、都市を規模の大きさによって階層に分けた場合、小規模の都市からより上層の大都市へ移動する傾向が強いことを意味するものである。特に都市間の機能的関連性が強いときには人口移動も多くなる。

都市化が進んでいるアメリカやヨーロッパの一部の報告では、多角方向性移動、つまり都市階層による垂直的な移動だけではなく、移動方向が多様化しているとされている。しかし私の研究では、韓国は都市化が進んでいても、依然として小都市から大都市へと階層的移動が多くな

っている。

現在の私の研究テーマは、「韓国と日本における都市間人口移動の比較研究」であり、近接性や階層的結合関係が人口移動にどれほど影響を及ぼしているのかを究明することを目的としている。そのためには、移動要因を総量の分析だけではなく、類型別に分析する必要がある。この研究では、韓国と日本における都市間人口移動のメカニズムを体系的に説明するために都市を規模ごとに階層分類し、そこから都市階層間移動を考察しようとしている。

## 韓国における都市間人口移動の階層性と都市システム

私はこれまでの研究で次のような報告を行ってきた。

1) 韓国においては、ソウルから周辺衛星都市への人口流出の増加が見られるものの、農村部や中小都市から大都市圏への人口移動は依然続いており、特にソウルと釜山を頂点とする都市システムの階層格差はますます大きくなっている。小都市から直接大都市へ移動せず、小都市-中都市-大都市というように段階的に移動するステップワイズ性もこうした階層性を反映している。

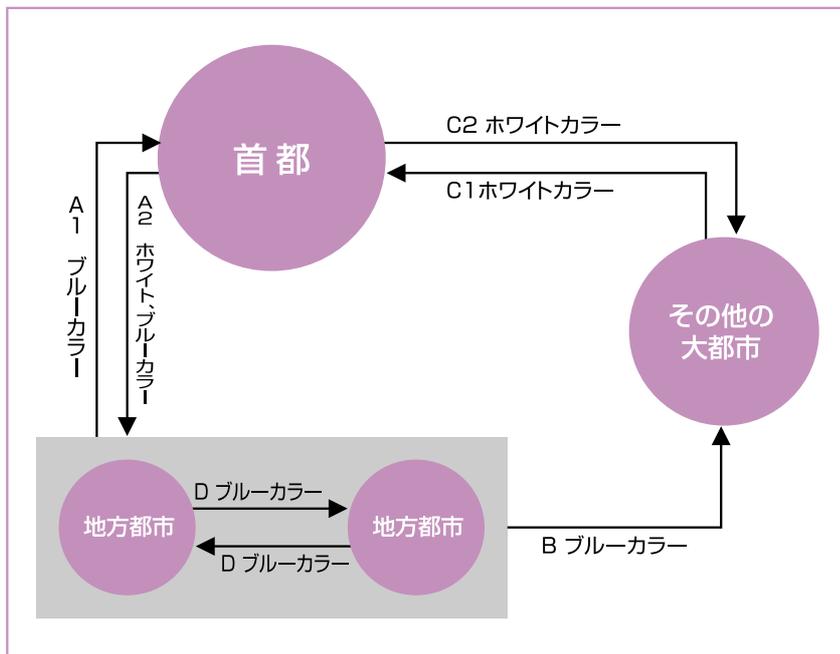
2) 韓国の都市間人口移動は製造業が主導してきたことが特徴となっている。このことから、韓国の都市間人口移動は総じてブルーカラー層を主体とするものといえ、先進諸国のような第3次産業の重要性はそれほど大きくないといえる。

3) 大都市が流入人口をブルーカラー層とホワイトカラー層とに分解する機能を持っている。

4) 大都市間人口移動においても、首都と他都市との間では、歴然とした階層的な差が存在している。

もとより、都市間人口移動の増加は、都市ネットワークによる国土コントロールシステムの成立を意味する。これまでの私の研究は、韓国社会が都市階層間人口移動を通じてこのシステムを確立させつつあることを示すものであった。しかし、1990年代初めから、このような傾向に変化が生じていると思われる。それは、ソウルを中心とする都市システムの強化とともに、地方広域中心都市を中心とする都市圏の拡大である。それには、情報化、都市サービス産業化、グローバル化などが関係していると考えられるが、これに関する実証的な研究は行われていない。今後はこのような側面からの研究が必要であると考えている。

### 都市間人口移動の概念図



## 非階層的移動中心の先進諸国

欧米諸国では、いわゆる安定成長への移行とともに都市への人口集中が鈍化し、階層間つまりタテの関係に代わって水平的な相互関係が強まりつつあり、反都市化への移行も報告されている。欧米・日本などの先進工業国においては、農村人口の減少とともに、国内人口移動の主流が「農村-都市」移動に代わって、都市間人口移動によって担われている。このような変化は「人口移動の転換」や「人口移動の新局面」などと呼ばれている。

日本は韓国よりも人口移動の転換が早くから始まっており、マルチチャンネル化している。具体的には、3大都市圏から非大都市圏への人口流出の増大、大都市圏内および大都市圏間移動の増大、県内市町村間移動の増大などが指摘されている。

先進工業諸国の場合、都市人口の増大



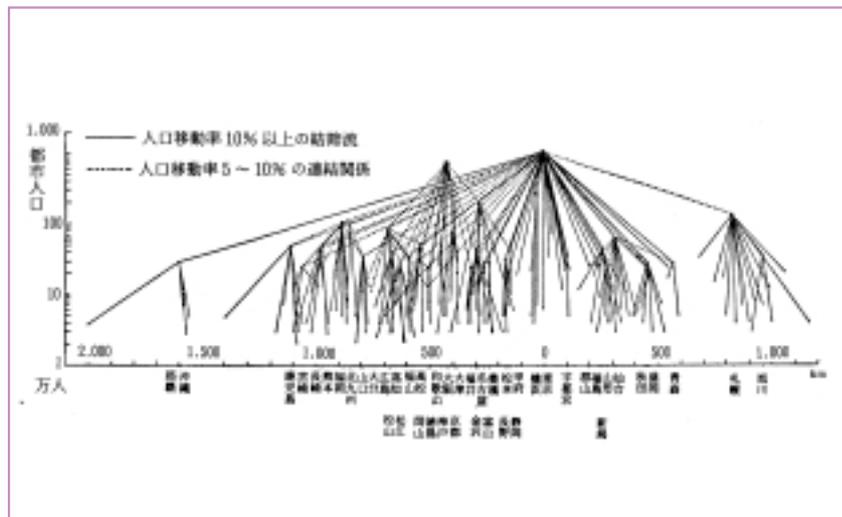
東北大学でのセミナー発表のようす

と並行して活発化した都市間移動の移動圏が、国家的なレベルに広がっているために、小都市-中都市-大都市へと段階的に移動するステップワイズ移動の傾向は弱くなりつつあるといわれている。これは、各都市の移動圏が従来の傾向を維持しつつも、独自の吸引圏を国全体に広げ、結果として各移動圏が非階層的になりつつあるといった状況を示すものである。

## 比較研究から相互理解を

私は以前、東北大学に留学した経験があり、帰国してからも、日本の大学との交流事業に関わってきたので、日本の研究成果に接する機会が多かった。そのため、このたびの訪問研究により、両国の比較研究をより効率的に行うことが可能になると考えている。両国における人口移動の現象それ自体は似ていても、国家構造や社会的構造などの差によって、移動の特性やその移動が及ぼす影響の程度は違ってくる。それを探る研究は学問的な側面はもちろん、両国の相互理解にとっても大事なことであると考えている。

## 人口移動から見た日本の都市の連結関係



出典：森川洋(1985)『日本の都市化と都市システム』より

### PROFILE

じょん ほんよん



国立公州大学校人文社会大学地理学科教授。これまで韓国における新行政首都移転問題の研究に取り組んできた。2004年8月から日韓文化交流基金の研究支援を受け、東北大学で研究を行っている。

## 日本で印刷された「解放切手」

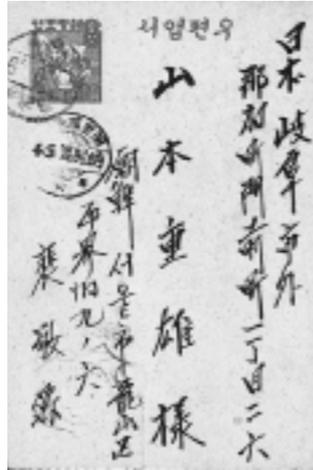
解放後まもない時期、米軍占領下の南朝鮮（大韓民国政府が正式に発足するのは1948年8月のことである）では、当初、日本時代の切手そのまま使用されていた。約半年後の1946年2月になって、ようやく旧来の日本切手に“朝鮮郵票”を意味するハングルをプリントした暫定的な切手も使用されるようになったが、占領当局からすれば、やはり日本からの解放を内外にアピールするためには、日本時代の切手を使用停止にして、新たにオリジナル・デザインの切手を発行することのほうが望ましい。

かくして、1946年5月、“解放記念”の名目で6種類の切手（解放切手と呼ばれている）が発行されることになった。

ただし、実際にはこれらの切手は記念切手ではなく通常切手として用いられる計画であったから、6種あわせて1億枚弱を準備するというプランが立てられた。しかし、これだけの量の切手を、短期間に確実に製造しうる印刷所は、当時の南朝鮮内には存在しない。このため、デザイナーの金重鉉がソウルで作成した原画をもとに、日本の印刷局で原版を作成し、印刷するという方式で切手が調製された。5ヶ月ほど経った後の1946年10月、現地の民族企業である京和印刷所の製造した通常切手がお目見えするが、解放切手そのものは、その後も有効であった。

## 収納印の押された葉書

一方、米軍占領下の南朝鮮では、葉書に関しても、当初は日本時代のものが有効で、料金改定のたびに収納印（差額分の料金を徴収したことを示す印）が押されて使用されていた。このため、解放切手と同じデザインの葉書の製造が日本の印刷局に発注された。



解放後まもなく植民地時代の日本の切手やそこにハングルをプリントしたものが使われていたが、1946年5月からオリジナルの切手が使われるようになった

日本製の葉書は1953年末まで使われた。ここで紹介しているのは、1949年9月に差し出されたもの

この時点では、南朝鮮内の葉書料金は5チョン\*である。しかし、日本側では、用紙の確保に手間取り、葉書の製造には予想以上の時間がかかってしまった。その間に、南朝鮮内ではインフレが急速に進行し、1946年8月には葉書料金が25チョンに値上げされる。日本製の額面5チョンの葉書は、この料金改定までに納品が間に合わず、使い道のないまま、お蔵入りとなるはずだった。

しかし、南朝鮮内のインフレは留まるどころを知らず、1947年4月には葉書料金がさらに50チョンになり、それまで流用していた日本時代の葉書の在庫も不足しはじめた。このため、南朝鮮郵政は、急遽、倉庫に眠っていた日本製の葉書に収納印を押して発行・使用することを決定。以後、日本製の葉書は、あいつぐ料金改定のたびに新たな収納印を押すなどして、1948年8月の大韓民国成立、1950年6月～1953年7月の朝鮮戦争を経て、1953年末に2羽の雁が飛ぶデザインの印面の葉書（もちろん、韓国製）が発行されるまで、6年あまりにわたって使用されることになる。

## 「日帝36年」と「解放後」の間

我々が韓国の現代史をイメージする

と、どうしても、“日帝36年間”と“解放後”の間の断絶に目が行ってしまいがちだ。

もちろん、1945年8月の植民地支配の終焉が歴史の大きな転換点になったことは否定しがたい事実である。しかし、人々の生活や意識は、ある1点を通じた瞬間に突如として別のものに変異するわけではなく、現実には、目には見えないような微細な変化の積み重ねによって変わっていくしかない。舞台が朝鮮半島であっても、例外ではあるまい。

解放後もしばらくの間は日本時代の切手や葉書がそのまま使用され、さらに、日本製の解放葉書は解放後8年あまりも使われていたという事実は、まさに、そうした段階的に変化していく歴史の一面面を我々に見せてくれるものといっても良いように思う。

(\*「チョン」は当時の通貨単位)

### PROFILE

ないとう ようすけ



1967年東京都生まれ。郵便学者。現在、切手の博物館副館長。2002年1月より週刊『東洋経済日報』にて「切手で読む韓国現代史」を連載中。著書に『北朝鮮事典』（竹内書店新社、2001年）ほか多数。2004年11月に『切手と戦争』（新潮新書）が出たばかり。

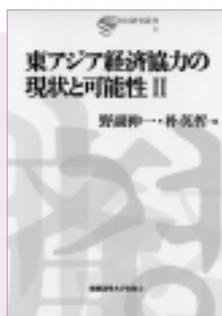
# 日韓文化交流基金事業報告

10月～12月

## 日韓共同研究フォーラム

日韓共同研究フォーラムの第2次研究タームの成果として、「日韓共同研究叢書」の第8・9巻が慶應義塾大学出版会から刊行されました。

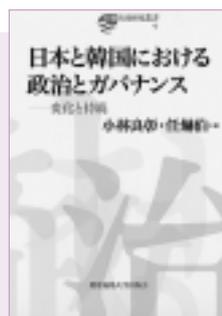
### 経済チーム



第8巻  
『東アジア経済協力の  
現状と可能性Ⅱ』  
(野副伸一・朴英哲編)

アジア金融危機以降の日韓における金融・企業構造調整を軸に、直面する経済の課題を比較・分析する。

### 政治チーム



第9巻  
『日本と韓国における政治と  
ガバナンス—変化と持続』  
(小林良彰・任熾伯編)

日韓両国の政治改革、地方分権、社会政策、企業と政治の関係等の比較分析を通じて、あらたなるガバナンスの形を模索する。

2002年に刊行された『国家理念と対外認識—17～19世紀』韓国語版（「韓日共同研究叢書」第3巻、亜研出版部）が韓国学術院の2004年度基礎学問分野優秀学術図書（社会科学分野）を受賞しました。



## 図書出版助成

### 単行書

『沈黙で建てた家』（曹恩 著、中村福治訳）平凡社

朝鮮戦争とその後の冷戦の時代を、韓国の人々はどのように経験し、どのように記憶しているのだろうか。『沈黙で建てた家』は、朝鮮戦争に始まる一人の女性の50年の記憶を中心に、生活の中に深く埋め込まれた内戦と分断の記憶が、韓国社会の奥底に深い抑圧や亀裂をもたらしていることを静かに明らかにしてくれる。



## 「韓国の学術と文化」シリーズ新刊

韓国図書翻訳出版事業により、「韓国の学術と文化」シリーズの17冊目の図書が法政大学出版局より刊行されました。

『韓国仮面劇—その歴史と原理』  
(田耕旭著、野村伸一監訳、李美江訳)

中世末の朝鮮社会で生まれ、民衆文化に深く根を下ろして今日まで脈々と継承されてきた仮面劇（タルチュム）の歴史的展開を考察しつつ、韓国仮面劇の全体像を探り、アジア民衆のおおらかな民俗芸能の流れの中に位置づける。



## 学術定期刊行物



『現代韓国朝鮮研究 第4号』  
現代韓国朝鮮学会編、新書館



『韓国朝鮮の文化と社会 3』  
韓国・朝鮮文化研究会編、風響社

## 訪日団

団体名	団長	計	男	女	期間	訪問校
大学生 (1)	金永泰 培材大学校観光経営学部 副教授	20	7	13	10/19-10/28	明治学院大学、関西学院大学
大学生 (2)	朴鍾明 建国大学校口語教育科 教授	20	10	10	10/19-10/28	東洋英和女学院大学、秋田大学
大学生 (3)	李清圭 嶺南大学校文化人類学科 教授	20	15	5	11/9-11/18	慶應義塾大学、高知工科大学
大学生 (4)	金閨七 慶州大学校建築学部 教授	20	11	9	11/9-11/18	東京女子大学、東北大学

## 訪韓団

団体名	団長	計	男	女	期間	訪問校
札幌市教員	西村喜憲 札幌市教育委員会学校教育部 指導担当課長	20	14	6	10/20-10/29	ボミル中学校 (大邱)、 景明女子高等学校 (大邱)、 インジ初等学校 (釜山)



インジ初等学校で授業見学する札幌市教員

## 中学生訪日団

団体名	団長	計	男*	女*	期間	訪問校
高校生 (2)	任昶淳 冠岳高等学校 校長	95	41	49	10/12-10/16	大阪府立金剛高等学校、 鳳高等学校
高校生 (3)	金容均 盤浦高等学校 校長	95	34	55	11/2-11/6	大阪府立大手前高等学校、 千里高等学校



※生徒のみの人数  
千里高校でのグループ交流  
高校生 (3)

## 中学生訪韓団

団体名	団長	計	男*	女*	期間	訪問校
奈良県高校生	多賀義彦 生駒高等学校 校長	109	24	76	10/6-10/10	盤浦高等学校 (ソウル)

※生徒のみの人数

## 報告書

フェロシップ事業と大学生訪韓研修団の報告書が完成しました。これらの報告書は基金図書センターにおいて閲覧が可能です。

- 訪韓学術研究者論文集 第五巻 (2003年4月~2004年3月)
- 訪日学術研究者論文集—一般— 第十一巻 (2001年10月~2004年3月)
- 訪日学術研究者論文集—歴史— 第八巻 (2002年6月~2004年3月)
- 大学生訪韓研修団 (2004年3月2日~3月11日) 報告書
- 大学生訪韓研修団 (2004年5月18日~5月27日) 報告書

## 公募プログラム案内

### 2005年度上半期 人物交流助成 申請受付

「青少年・草の根交流」「シンポジウム・国際会議」「芸術交流」への支援を行う人物交流助成は **1月4日から2月1日**までの期間で上半期の申請を受け付けます。今回の募集は2005年度全期間の事業を対象としています。募集要項および申請書をご希望の方は基金ウェブサイトか

らファイルをダウンロードするか、基金に直接お問い合わせください。

なお、下半期募集 (2005年10月~2006年3月に実施する事業を対象とする) は **6月1日から7月1日**を予定しています。